

詩のオノマトペ

船 橋 実 恵

0 章 序 論

オノマトペ（擬音語・擬態語などの総称）は日本語の特色とっていいほど日本語に豊富である。日常会話のなかで使うのはもちろんのこと、商品の目を引く広告、新聞や雑誌の見出し、漫画・小説・物語・詩等の文学作品などさまざまな場面でみられ、日本にはオノマトペがあふれている。また現代のみならず、奈良・平安・鎌倉時代などにもオノマトペは存在し、各時代を代表する文学作品等に登場してきた⁽¹⁾。オノマトペは日本の文化に深く根付いているといえるだろう。おそらく日本で育った人には、ほとんどのオノマトペの意味をなんとなく理解することができる。しかし外国人にとって日本語のオノマトペは難しい。また我々日本人は感覚的にオノマトペを理解しているため、それを外国人に説明することが困難である。日本語のオノマトペを外国人がどのように理解するのか、またどのような言葉で解釈されているのかという疑問が本稿を書く原点となった。実際にどのように英語に置き換えられているのかを調べることにした。比較する言語は我々にとって最も身近な言葉である英語にした。1章では日本語と英語のオノマトペの定義、形態、文法を比較・考察した。そして2章では実際に日本語のオノマトペがどのよ

うに理解し解釈されているかという問題について、最も入手が可能という点で文学作品とその英語翻訳を比較・分析することにした。散文におけるオノマトペの研究が多くの学者によってなされているなか、本稿では文学作品のなかでも特に「詩」に注目した。詩のもつリズム感や音遊び、微妙な表現をどのように英訳されているかを分析・考察していきたい。

1 章 日本語と英語のオノマトペ

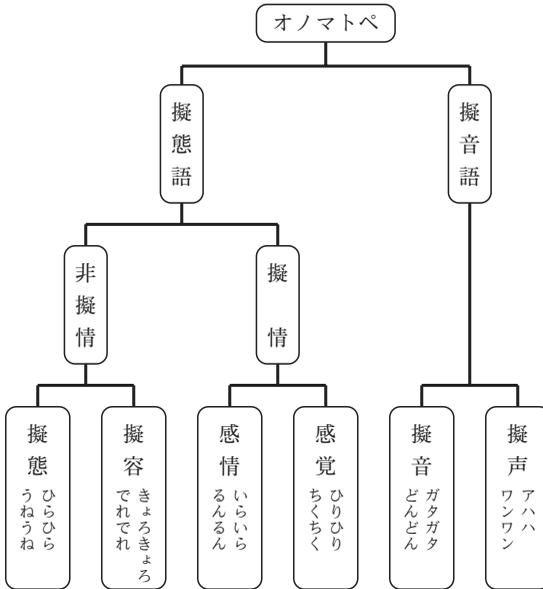
1. 1 人間言語の語彙の恣意性とオノマトペの有契性

スイスの言語学者ソシュールの「言語記号は恣意的である」という言葉はあまりにも有名である。記号表現と記号内容との間には必然的な結びつきはないということだ。例えば日本語の[inu]という音声は必然的に犬を意味するわけではなく、英語では犬を[dog]という言語音で表す。一方でオノマトペはその例外で、有契性を持つとされている。つまり言語記号が意味(概念)をある程度まで直接的に反映することができる。音素そのものに何らかの感覚、印象といったものがあり、それが表す意味に反映されている。

1. 2. 1 日本語のオノマトペ

オノマトペとは、フランス語の *onomatopée* から借用した借用した外来語であり、英語では *onomatopoeia* という。いずれも「命名する」というギリシャ語 *onomatopoiia* (*onoma* 'name' + *poiein* 'to make') に由来する。(田守 2002: 4) また一般的には擬音語・擬態語と呼ばれ、外界の物音、人間や動物の声、物事の様子や心情を直接直感的に表現する言葉である。詳しい分類は筧・田守(1993)による表1の通りである。

【表1】オノマトペ



ただし、本稿では擬声語・擬容語・擬情語まで分類せず、大まかに擬音語と擬態語として扱うことにする⁽²⁾。

1. 2. 2 日本語のオノマトペの形態

典型的なオノマトペの形は「からから」「とろとろ」のような反復形である。また「ふと」「つと」のような1拍語のものや、「とんちんかん」「つんつるてん」のような6拍のものもある。

1. 2. 3 日本語のオノマトペの文法

次に、オノマトペが実際にどのような品詞として用いられているかをみていく。

- (1) a. 先生に指名されて、この少年ははきはきと返事をした。
 b. 突然のサイレンの音に、はっと驚いて飛び起きた。
 c. 弟は夕立に遭ったらしくびしょびしょに濡れて帰宅した。
 d. 久方ぶりに大掃除をして床をびかびかに磨いた。
 e. うとうとしているうちに降りる駅を通り越してしまった。
 f. 髪の毛が痛んでばさつく。
 g. そとで運動でもすれば、心のもやもやもふっ飛ぶよ。
 h. 彼女の書く英文はまだたどたどしい。
 i. 女性は着物を着ると自然にしとやかになる。

(1a)、(1b)、(1c)、(1d) は副詞として用いられている。(1a)、(1b) は特に「様態副詞」と呼ばれ、助詞の「と」を伴って動作にかかわる様々な様態を記述するものである。(1c)、(1d) は「結果副詞」と呼ばれ、作用ないしは動作によって状態変化がもたらされ、その結果変化した主体あるいは対象の状態を記述するものである。(1e)、(1f) は動詞として用いられている。(1e) はオノマトペが「する」という動詞に組み入れられて派生したものである。(1f) はオノマトペが「つく」という動詞に組み入れられて派生したものである。(1g) は名詞として用いられ、(1h)、(1i) は形容詞、形容動詞として用いられている。

このようにオノマトペは副詞、動詞、名詞、形容詞、形容動詞として用いられるが、なかでも副詞の用法が最も多い。その理由のひとつは、オノマトペがもともと音声や様子を描写して述語を修飾する用法から出発しているからである。さらに重要な点は、副詞としてのオノマトペは生産性が高いということだ。例えば、ある動作に音が生じたとする。その音を活字化する。その文字化された音に、助詞の「と」または「に」を付けるだけで副詞として認識され、語

彙化される。

例えば小さい子どもが椅子に座り足をぶらつかせている様子に伴う音を [batabata] とする。それを「ばたばた (バタバタ)」と活字化する。これに「と」または「に」をつけることで副詞として語彙化され認識される。このように活字化された音は多くの人が使用されるようになると定着し慣用化される。このようなプロセスで、日本語のオノマトペは生産性が非常に高い。寛 (1993) は「「と」には引用性があるため、生産性が高い」と述べている。

1. 3. 1 英語のオノマトペ

ここでは英語のオノマトペを紹介する。Oxford Dictionary of English で onomatopoeia の項を調べると、"the formation of a word from a sound associated with what is named (e.g. cuckoo, sizzle)." とある。また、onomatopoeia は、'mimesis' や 'mimetic words' と言われることもある。

1. 3. 2 英語のオノマトペの形態と文法

英語のオノマトペの形態として、quack-quack (がーがー)、arf-arf (わんわん)、choo-choo (しゅっしゅっ) のような連続した繰り返しの音を表すのに反復形が利用されているものがあり、最も原始的な形態である。そして click-clack (かたこと)、flip-flap (ばたばた)、hip-hop (びょんびょん) のように音が一部変化した反復形がある。それから、baa (メー)、fizz (シュシュ)、bonk (パン)、blab (ベラベラ)、scrunch (パリパリ) 等の形態をとるものがあるが、英語のオノマトペの中ではこの形態が最も多い⁽³⁾。これらは動詞として語彙化されることが多い。それは英語が様態を動詞で表す言語だからである。(Talmy 2000) この非反復形は音象徴

(sound symbolic) と呼ばれるが、本稿では有契性のあるものは全てオノマトペ相当語と呼ぶことにする。

2章 詩とオノマトペ

2.1 先行研究

日本語・英語ともにオノマトペは存在するが、生産性は大きく異なる。その数にはかなりの差があり、乾の調査（『市河三喜博士還暦祝賀論文集』）によると、英語が350種類しかないのに対して日本語はなんと1200種類に及ぶ。それは1章で述べたように日本語のオノマトペ、特に副詞の用法のオノマトペが生産的で「と」や「に」を加えるだけで語彙化される。一方で英語は一般的にオノマトペといわれる語（quack-quack等）の多くは間投詞または名詞として用いられ、動詞として語彙化されるのはほんの一部であり、生産的ではない。このような日本語と英語の違いは翻訳される際にはどのように対処されるのだろうか。

かつて多くの研究者が宮沢賢治、吉本ばなな等の散文におけるオノマトペの日英比較を行ってきた。窪（1997）は、英訳された宮沢賢治の小説を、笈（1982）が分類したオノマトペをもとに分析した。すると78%の日本語のオノマトペ（ほとんどが擬態語）がオノマトペとして英訳されず、そのかわりに説明的な訳がされていたという。また、Edström（1989）は川端康成の『雪国』の英語翻訳のうち、訳出されたオノマトペ200のうち60が省略されていたと指摘している。このように散文ではかなりの数のオノマトペがオノマトペとして英訳されていないようである。そのためオノマトペによる表現が失われてしまうことが予測されるが、小説のような散文では多少省略されたり別の言葉で補ったりしても、物語の内容は伝わ

るだろう。

しかし詩のような韻文の場合はどうだろうか。詩はオノマトペを最大限に活かし、繊細かつ微妙な描写を可能にし、オノマトペの良さをいっそう際立たせる。一つ一つの言葉が奏でる音やリズム感、響きが生き生きとした臨場感を作り上げるため、オノマトペが必要不可欠である。小説と違って、押韻・韻律・字数などのきまりがあるため、省略や説明的な訳では詩のよさが失われてしまい、詩そのものをだめにしかねないだろう。英語翻訳においてこのような点はどう英訳されているだろうか。英語でも日本語の詩と同じ情感を味わうことができるのだろうか。

2. 2 詩の分類と分析

ここでは実際に日本語の詩とその英訳を比較・考察していく。分析対象の詩は日英対訳されたもので以下のものである⁽⁴⁾。

- I 『楽しい稲妻』(木島始 編)
- II 『睫毛の虹』(金子みすゞ)
- III 『どうぶつたち』(まどみちお)
- IV 『ふしぎな ポケット』(まどみちお)
- V 『英語で読む宮沢賢治詩集』(宮沢賢治)
- VI 『Songs for Children sung in Japan』(上原征生)
- VII 『うつむく青年』(谷川俊太郎)
- VIII 『日々』(谷川俊太郎)
- IX 『ブローディガンのサイン』(岡野絵里子)

これらの詩に見られるオノマトペとその英訳を、日本語のオノマトペの定義に基づき品詞別に分類した。擬態語⁽⁵⁾は「動詞に置き換

えられたもの⁽⁶⁾、「現在分詞に置き換えられたもの」、「副詞に置き換えられたもの」、「形容詞に置き換えられたもの」、「省略されたもの」、「その他の語で補ったもの」に分類することができた。擬音語は「動詞に置き換えられたもの」、「形容詞に置き換えられたもの」、「名詞に置き換えられたもの」、「音のままローマ字で表記されたもの」、「違うオノマトペで表記されたもの」に分類し、下記のようにまとめられる。

【表 2】擬態語の分類

動詞に置き換えられたもの	31(30%)	現在分詞に置き換えられたもの	14(14%)
副詞に置き換えられたもの	16(16%)	形容詞に置き換え	10(10%)
省略されたもの	11(11%)	その他の語で補ったもの	18(18%)
合計	100(100%)		

【表 3】擬音語の分類

動詞に置き換えられたもの	8(33.3%)	省略されたもの	1(4.1%)
形容詞に置き換えられたもの	1(4.1%)	名詞に置き換えられたもの	1(4.1%)
音のままローマ字で表記されたもの	10(42.1%)	違うオノマトペで表記されたもの	3(12.5%)
合計	24(100%)		

オノマトペであるかどうかということに関しては、基本的にはオノマトペ辞典⁽⁷⁾に従った。しかし1章で述べたように、物音や動作の様態等を表す臨場語や、一般的にはよく使われているが辞書に載っていない語、さらに造語とみられる語もオノマトペに含めた。また分析の対象にした詩は、オノマトペが書かれた行またはオノマトペのみを抜粋した。英訳はそのオノマトペに対応するものを抜粋した。

すると、かなりのオノマトペがオノマトペとして英訳されており、2. 1 で述べたような散文のオノマトペの英訳とは全く異なる結果が出た。特に擬音語では「音のままローマ字で表記されたもの」が42.1%、「違うオノマトペで表記されたもの」が12.5%と多くみられ、オノマトペとして英訳されたものが多くを占めることがはっきりとわかる。それだけでなく一つ一つをみていくと、オノマトペ相当語にあたるものが多くみられ、英訳には様々な工夫がなされている。これらを次節で詳しく考察していく。

2. 3 擬態語の英訳の考察

擬態語は英語で動詞（相当語の現在分詞を含む）として用いられることが多いことが検証された。品詞別に分析したところ、パラフレーズされた英訳や省略もみられたが、オノマトペ相当語による英訳が多くみられた。以下で分析においてみられた様々な特徴をみていく。

2. 3. 1 擬態語が動詞（相当語）に英訳された場合

動詞（相当語）として英訳された語を分析したところ、かなりの数がオノマトペ相当語で英訳されており、詩のオノマトペの効果を失わないように工夫がなされているようだ。

(2)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	二種原付の <u>パタパタ</u>	A second-class motorcycle <u>purring</u> . (VII)
b	<u>がぶがぶ</u> 湧いているですからな	<u>Gurgling and gushing</u> up (V)
c	<u>ジュツ</u> と身をちぢめたりするの	they will contract, <u>fizz, fizz, fizz</u> .

	だ	(I)
d	しーんと しちゃってさ	Hushed in wonder. (III)
e	ぶんぶんと絶えず震わせながら	incessantly buzzing (I)
f	めと めで ぴかっと…	Something clicked between us. (III)

(2a) は [p] の無声両唇破裂音が共通している。(2b) は [g] という音を使った別の単語を2つ並べることで、日本語の反復形を再現しているようだ。(2c) は「ジュッと」の語頭の [dz] の有声歯茎硬口蓋破裂音^⑧と、'fizz' の語尾の [z] の有声歯茎摩擦音は類似している。(2d) は [s] と [ʃ] の無声摩擦音が共通している。(2e) は [b] の有声両唇破裂音で共通している。(2f) の「ぴかっと」と clicked の音は異なるが、促音「っ」と [kɪk] の [ɪ] と [k] の間の音が瞬時的な様態を表している。

(3)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	ぎちぎちと鳴る	creak (V)
b	街々はがらがら崩れていって	town came crashing down (I)
c	『うふふふ……』	she chuckled to herself (IX)

(3) の例文は一見共通する音がないように見える。しかし、(3a) の creak は「キーキー [ギーギー] 鳴る音、きしる音」、(3b) の crash は「(物が倒れたり、こわれたりするときの) 音《ガチャン・ガラん・ガラガラ》」、(3c) の chuckle は「クスクス笑う」という意味で、同じ意味で別のオノマトペに相当する音 [k] が用いられている。

英訳のなかでも多くみられたのは、英語の語頭 [fl-] と [gl-]

の動詞だった。これらの動詞に関しては多くの研究者が音と意味を分析している。井上恭英氏（2000）は語頭が [fɪ-] の動詞は「空間を動く物のイメージ」で音声形式と意味の間にある種の音象徴のような有契性がみられると述べている。Bloomfield (1933 : 245) は語頭が [gl-] の動詞の象徴的意味を 'unmoving light' (動かぬ光) としている。また、[g] の発音は舌の奥、つまり後舌面を上げ、軟口蓋に押しつけ、それから軟口蓋から離す時パッと息を出して発音する。このような破裂音は光が直進する時のイメージと一致する。下はその例である。

(4)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	はらはらはらと花散る日	he petals <u>hall fluttering</u> in the wind. (VI)
b	ぐるぐる眼がまわりそう	<u>Fluttering</u> like a vast curtain (I)
c	風に袂がヒラヒラと	her sleeves are <u>flapping, flapping</u> lightly in the winds, (VI)
d	びかびかびかびか田圃の雪がひかってくる	the snow in the rice fields <u>glitters, sparkles</u> (V)
e	羽に朝日がキラキラと	the bright morning sun is <u>glittering</u> upon her wings. (VI)

下記 (5) の例文は英訳が 'burst' のものである。(5b)、(5c) をみるところ、「ぱっと」は 'burst' としての英訳がかなり定着したものだと思われる。共に両唇閉鎖音で、花のつぼみが開く瞬間の様子を唇で表しているようである。

(5)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	ひとり <u>でばらりと開く</u> のが	<u>bursts</u> into bloom all by itself (II)
b	<u>ぱっとひらいて</u>	They <u>burst</u> open (II)
c	のほらが <u>ぱっとひら</u> ければ	The meadow <u>bursts</u> open (V)

2. 3. 2 擬態語が形容詞・副詞に英訳された場合

形容詞と副詞に置き換えられたものはオノマトペがほとんどみられず、単なる名詞の説明になってしまい、オノマトペの効果が全く英訳に反映されていない。

(6)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	<u>しゃっきりのびた</u> 女の脚	a woman's <u>well-turned</u> legs (I)
b	雲は <u>ずんずん</u> 飛んで行く	the clouds go flying <u>fast</u> (VI)
c	汗 <u>びっしょり</u> になって斜面を <u>上った</u>	Climbing the slope, we sweat <u>profusely</u> (VIII)

(6a) の 'well-turned' は「〈足・足首が〉格好のよい、均斉のとれた」という意味で、「しゃっきり」とはほぼ同じ意味だが、音と意味との有契性は感じられない。(6b) の 'fast' は「速く、次から次へと」という意味で、雲が速く動く様子を表しているが、これも「ずんずん」の有声歯茎破音 [z] から感じられる何かか押し寄せる様子や、反復によって表される様態の継続性が感じられない。(6c) の 'profusely' は「過度に、やたらと」という意味で、とくに 'sweat profusely' で「ひどい汗をかく」と訳され「汗臭さ」を感じるが、実際この詩では「一生懸命斜面を上って、汗でびっしょり

になった」という意味が込められている。

2. 3. 3 擬態語がその他の語で英訳された場合

その他の語で補ったもののなかには、なんとか日本語のオノマトペに近づけようとしたものがみられる。辞書にはオノマトペとして扱われていないが、音の一部が共通していたり、拍数が似ていたり、翻訳の工夫がみられた。

(7)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	じりじりとずらされても	is being pulled toward me, <u>inch by inch</u> (I)
c	—— なみが <u>ぐるぐる</u> うずま いて できた	While the waves were <u>whirling Round and round</u> . (III)

(7a) は 'inch' を2つ並べることで語呂のよさが合う。また /i/ の音が共通し、Jespersen (1922) は母音 /i/ の音は狭い、細い、弱い、薄いなどの意味を表すと述べている。

(7b) の 'round' は「丸いもの」のイメージで、これも2つ並べることで語呂が合う。これを改行することで 'Round and round' を強調させている。また、'whirling' を始めとして /w/ の音と両唇を丸くする調音法が効果的に丸いものを連想させており、詩全体のリズム・響きがとても心地よい。

2. 4 擬音語の英訳の考察

擬音語ではオノマトペによる英訳が多くみられた。またほとんど省略されることがなく、オノマトペ特有のリズム感がそのまま英訳

されていた。擬態語と同様に動詞としての英訳が多く、その動詞のなかでもほとんど全てがオノマトペ相当語であった。

2. 4. 1 擬態語が動詞で英訳された場合

動詞で英訳されたものは擬音語が動詞に組み込まれたものと、動詞としての意味を持たず音だけを似せたものがみられた。

(8)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	仔猫のように <u>ミューミュー</u> と鳴く	<u>mews like a kitten</u> (I)
b	<u>チュッチュッチュ</u>	<u>chirp, chirp, chirp</u> (VI)
c	雀が <u>ちゅんちゅく</u> 鳴いている	Little birds are crying: <u>Tweet!</u> <u>Tweet!</u> (VI)
d	<u>とんとん</u> 叩けど、よう起きず	<u>Knock, knock!</u> But not a stir (VI)
e	<u>ヒョーヒョーヒョー</u> くそったれ!	<u>View—view—reviews—shit—on—</u> <u>you!</u> (I)
f	<u>しーっ！</u> っと	say, " <u>Hush!</u> " (III)
g	<u>ぼたり</u> , 地の上に 小さな音が ころがり落ちた。	<u>Plop!</u> On the ground A little sound Has fallen. (VI)

(8a) は日本語と英訳がほぼ同じ音で、猫の鳴き声とその音はかなり類似していると思われる。(8b)、(8c) はともに雀が鳴く音を表しているが、違う単語を使うことで微妙な違いを表している。(8d) は寝ている人の体を軽く叩いて起こす様子を表し、'knock'の「軽く叩く音」と類似している。(8e) は「ヒョー」を 'view'、 「ヒョー」を 'review' にすることで、意味はまったく解さないが、日本語英語ともに拍数が同じで、語呂のよさを表している。また、英語にはない長音を「—」で表現している。(8g) は「静かに！」

という意味で共通している。日本語は /s/ の音が無声歯茎硬口蓋摩擦音 [ç]、英語は無声硬口蓋歯茎摩擦音 [ʃ] で、摩擦音が共通している。英語には 'shh' (しーっ) という間投詞もあるが、あえて「しっ」と短い音をあてている。(8g) は [p] の音や語呂が合っているし、「!」を用いて音であることを強調している。

2. 4. 2 擬態語が音のままローマ字で表記されたものの場合

擬音語の英訳で最も多かったのは、日本語のオノマトペが音のままローマ字で表記されたものだった。また、似ているようで少し違うオノマトペが用いられているものも多かった。

(9)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	ぐうぐうぐうぐうぐうぐうぐう	Gū-gū-gū-gū-gū-gū-gū! (VI)
b	びょんびょんびょん	Pyon, pyon, pyon! (III)
c	ほーぼーぐるる	Hō Pō, GruRu (III)
d	ピアノの音 ぼろん	Sound of a piano-Pō Ron, (IV)

(9a) の「gū」には英語で「空腹で鳴るお腹の音」という意味はないが、それに類似した 'growl' (空腹でお腹がなる) という擬音語が存在するため意味と音の結びつきが可能だろう。(9b) の 'pyon' に関しては英語で「ウサギが跳ねる音」と認識されるかどうかは不明だが、詩のなかにウサギが登場しているので意味と音が結びつくだろうと思われる。また、日本語には表記されていない「!」を最後に付けることで、音であることを強調しているようだ。(9c) は「ほーぼー」にみられる長音を [ō] で表し、(9c)、(9d) はローマ字の大文字と小文字を組み合わせることで日本語特有のアクセシ

トや拍を表しているように思われる。

(10)

	日本語による詩	日本語に対応する英訳
a	カンカラ カラロン	---ga gong ga, ga gong gong (I)
b	トライアングル つーん	Triangle-Ti~ng (IV)

(10a)、(10b) は日本語のオノマトペが英語のオノマトペによって英訳されている。(10a) の「カンカラ」はこの詩では「空き缶に石を入れて振ったときの音」である。英訳の 'gong' は「ゴングを鳴らす音」でもっと大きく重いものを鳴らすイメージで微妙に音が異なるが、リズム感は共通している。(10b) の 'ting' は 'tinkle' のことで、「チリンチリン鳴る」という意味をもつ擬音語である。日本でトライアングルの音は「ちーん」と表されるのが一般的に思われるが、この詩では「つーん」という独特な音で表現されている。その微妙な違いは英訳では表現されていないが「~」で少し鈍い音を表していると思われる。

3章 まとめ

本稿では日本語のオノマトペが外国人にはどのように理解されているのかという疑問を解決するため、日本語と英語のオノマトペを比較・考察してきた。1章では日本語と英語のオノマトペについて述べてきた。日本語のオノマトペは副詞としての用法が多く、オノマトペに「に」や「と」を加えるだけで語彙化することができるので簡単に作り出すことが出来るため生産性が高く数がとても多い。それに比べて英語のオノマトペは日本語のような機能を持っておら

ず、間投詞や名詞として用いられることが多い。なかには動詞や副詞に組み込まれたものもあるが、日本語のように簡単に作り出すことは出来ない。2章ではこうした違いを踏まえて実際に日本語と英語のオノマトペを比較・考察した。散文における日本語のオノマトペとその英訳の比較では、かなりのオノマトペが省略・パラフレーズされた英訳であった。それはオノマトペの翻訳の難しさからきたのだと考えられる。本稿では「詩」を題材にし、比較・考察を行った。詩は散文と違い一つ一つの言葉がもつ音やリズム感、響きが生き生きとした臨場感を作り、そのためにオノマトペは必要不可欠なのである。オノマトペはどのように英訳されているのか、比較・考察した結果、散文とは違いかなりのオノマトペがオノマトペとして英訳され、様々な工夫がなされていた。擬態語は動詞として英訳されているものが多く、オノマトペ相当語にあたる言葉が多く用いられていた。擬音語は音のみを真似たもの、拍数を真似たものなど様々な翻訳の工夫がなされていた。オノマトペの音とそれがもつ意味に有契性があるということが検証されたのである。

注

- (1) 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた 日本語の擬音語・擬態語が面白い』 光文社
- (2) 『現代擬音語擬態語用法辞典』 (飛田・浅田 2002) は擬音語として、活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の音・声を表現したもので、一定の形と意味を持ち、一定のグループの人々 (多くは同国語人) の間で抽象的・普遍的に通用するものだけを、擬態語として、活字化できる音声連続及び発音できる文字によって対象の様子を表現したもので、一定の形と意味を持ち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用するものだけを載せている。しかしその場で作られた擬音表現や詩歌・小説など文字言語に表さ

れた擬音表現の一種であると考えられる。本稿ではそれらもオノマトペとする。例文(1)はその例である。

(1) ああ私は私できりきりとお前を可愛がつてやり(萩原朔太郎「愛憐」)

- (3) 英語のオノマトペの音韻構造は多様で、日本語ほど形態がはっきりとしていない。それゆえに、どの語がオノマトペであるかという問題は、英語の場合もっと不明瞭である。オノマトペという伝統的な範疇は音、特に quack や oink 等の動物の鳴き声を表す語に限られるとする見解もあれば、動作の様態や状態を表すいくつかの語、特に dilly-dally のような反復語も含まれるとする見解もある。しかしながら、slip や trudge のような非反復語をオノマトペと見なすべきかどうかに関しては、見解が一致していない。(ローレンス 1993)
- (4) 以下、英訳の出所を英訳の末尾にギリシャ文字で表す。
- (5) 擬態語のなかには擬音語から転移されたものもある。
例：戸がガタガタ鳴る。→家の中はがたがただ。
- (6) 英語は単語の形の変化なしに品詞が変わること(転換)が頻繁に起こる言語である。(『日本語の音声入門』2003) 動詞に置き換えられたものの中には、名詞のものもある。
- (7) 浅野鶴子・金田一晴彦(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- (8) 破擦音とは破裂音と摩擦音がほとんど同時に調音される子音。原則として。破裂と摩擦は同じ調音点か、ごく近い調音点で行われる。

参考文献

- 浅野鶴子・金田一晴彦(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
 石黒広昭(1993)「オノマトペの「発生」」
 井上恭英(2000)『英語の認知メカニズム』晃洋書房
 猪塚恵美子・猪塚元(2003)『日本語の音声入門』バベル・プレス
 笥 寿雄(1993)「一般語彙となったオノマトペ」月刊言語、22-6、大修館書店
 笥 寿雄・田守育啓(1993)『オノマトペ 擬音・擬態語の楽園』勁草書房

- 窪 温子 (1995) 「宮沢賢治のオノマトペの世界」神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ擬音語・擬態語をたのしむ』岩波書店
- 中島平三・外池滋生 (1994) 『言語学への招待』大修館書店
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典 (単行本)』東京堂出版
- Bloomfield, L. (1933, 1967) *Language*, London: George Allen & Unwin
[三宅鴻・日野資純 (訳) (1965) 『言語』大修館書店]
- Jespersen, O. (1922, 1964) *Language: Its Nature, Development and Origin*, London: George Alen & Unwin.
- Talmy, Leonard (2000) *TOWARD A COGNITIVE SEMANTICS*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- ローレンス・スコウラップ (1993) 「日・英オノマトペの対照研究」月刊言語、22-6、大修館書店

google search

- Martin Flyxe (2002) 『*Translation of Japanese onomatopoeia into Swedish*』 <http://www.african.gu.se/aa/pdfs/aa02054.pdf>
- 高橋順一 『音象徴と類似性－英語語頭音 gl- ー』 http://libro.dobunkyoudai.ac.jp/ronshu/Ronsyu_No6/Bunkyoudai_Ronsyu_No6/02TakahashiA.pdf
- 日本語を楽しもう <http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/sankou/ronbun.html>
- 滝浦真人 「オノマトペ論 ことばにとっての“自然”をめぐる考察」
<http://homepage.mac.com/karmatt/onoma.pdf>
- 三上京子 「オノマトペア参考文献」 <http://www.gsjal.jp/kawaguchi/dat/onomatope.pdf>
- オノマトペ研究集 <http://72.14.235.104/search?q=cache:bMWpwaTl66sJ:www.tankajin.com/hyouron/onomatope.htm+%E8%A9%A9%E3%80%80%E3%82%AA%E3%83%8E%E3%83%9E%E3%83%88%E3%83%9A&hl=ja&ct=clnk&cd=14>

辞書

ジーニアス英和大辞典 second edition

ALC 英辞朗 on the Web <http://www.alc.co.jp/>

広辞苑 第五版 岩波書店

参考資料

木島 始 編『楽しい稲妻』(1998) 土曜美術社出版販売

金子みすゞ『睫毛の虹』(1995) JULA 出版局

まどみちお 美智子 選・訳『どうぶつたち』(1992) ミュゼ・イマジネール

————『ふしぎな ポケット (THE MAGIC POCKET)』(1998)
ミュゼ・イマジネール

宮沢賢治『英語で読む宮沢賢治詩集』(1997) 筑摩書房

上原征生『Songs for Children sung in Japan』(1997) 大空社

谷川俊太郎『うつむく青年』(2000) 響文社

————『日々 (Traveler)』(1995) ミッドナイト・プレス

岡野絵里子『ブローディガンのサイン』(1996) 青樹社